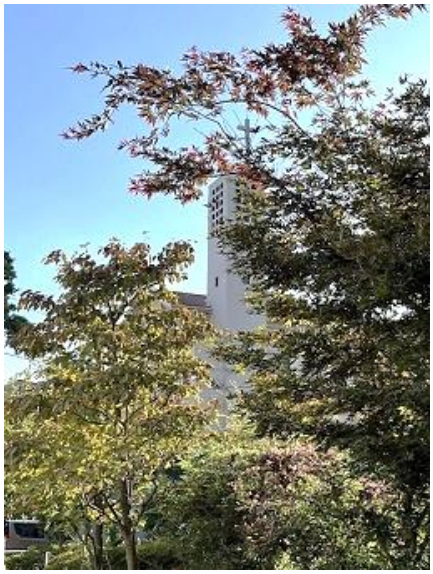
日本基督教団 高井戸教会

# 礼拝のしおり（2022 年 10 月号）

## ～主の御前に一つにされて～

ヤコブよ、なぜ言うのか
イスラエルよ、なぜ断言するのか
わたしの道は主に隠されている、と。
わたしの裁きは神に忘れられた、と。
・・・・・・・・・・
主に望みをおく人は新たな力を得
鷲のように翼を張って上る。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない。
（イザヤ書 40 章 27 節、31 節）



秋晴れの下、教会周辺の木々が
わずかに色づき始めました。

主の聖名を讃美いたします。時の経つのは本当に早いもので、今年もいつの間にか 10 月となりました。

高井戸教会では、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえつつ、求道者会、壮年会例会等、いくつかの集会が、再開されました。また、第 7 波が収まりつつある中、10 月からは、これまで長く 2 回に分ける形で捧げてきた主日礼拝を 1 回の礼拝に戻すことにいたしました。なおディスタンスをとっての着席、礼拝中のマスクの着用等、感染対策を施すことは続けますので、完全な形でコロナ以前に戻った訳ではありませんが、やはり、本当に少しずつではあってもコロナ禍による制約から解放されていくような思いになります。

コロナ禍にある現在までの約 2 年半の間に、私たちの生活はいろいろな点で大きく変わりました。日常的な習慣から、おそらく人によっては人生そのものに大きく関わるようなことまで、その影響を受けてきたと言えるのではないでしょうか。しかし、ふと立ち止まって思わされることがあります。私たちの内面は、どのように変化したのだろうか。いやそれほど変化していないということになるのだろうか。もし変化したとするならば、何がどのように変化したのだろうか、と。教会に生きる者にとっては、私たちの信仰にも関わることとして、そのことを思うのです。

一昨年、コロナ禍が始まった頃、「教会のコロナ捕囚」という言葉が語られました。教会堂に皆で当然のごとく集まることができなくなりました。それぞれの場所に留め置かれるようにして、またそこでも、さまざまな制約の中で生きなければならなくなりました。まるで、本来あるべき神の民としての教会の交わりから、そこに生きる者たち皆が引き離されるような思いを味わった。そのことが、ちょうど旧約の民がその歴史の中で経験した「バビロン捕囚」という出来事と、内実において深く重なり合うことを踏まえて、「教会のコロナ捕囚」と言い表されたのだと思います。

もちろん、私たちにおいては、「バビロン捕囚」のように、外国の侵略を受け、国が滅びてしまった訳でもなく、主だった人々が捕らえられ外国の都に連れて行かれた訳でもありません。しかし、コロナ禍と重なるようにして、ウクライナで起こった出来事を知ることとなりました。「バビロン捕囚」という出来事が起こった旧約の民の歴史、またこの世界の歴史とまさに地続きの場所に生きている私たちであることを痛感させられます。

「バビロン捕囚」は、旧約の民にとって、大きな危機、信仰の危機をもたらしました。将来が見えない。それゆえに希望もない。神を信じて生きることの意味を見失ってしまうような危機の時代でした。神から遣わされた預言者は、危機の中にある神の民と向き合い、論争するような調子で、語りかけます。「ヤコブよ、なぜ言うのか。イスラエルよ、なぜ断言するのか。わたしの道は主に隠されている、と。わたしの裁きは神に忘れられた、と」。預言者は、神の民に問いかけるのです。なぜ言うのか、なぜ断言するのか。わたしの歩むべき道、わたしの将来、それは主なる神にも隠されてしまった、と。神ご自身にも、わたしの将来など見えない。神もご存じない。神に忘れられてしまった。なぜそのように言うのか、なぜ断言するのか。

コロナ禍の中で、いや今この時も、預言者を通して語られる神さまからの問いかけが、私たちにも向けられているように思えてなりません。主に望みをおいて生きる道を、神さまから新たな力をいただいて歩む道を、共に見出し、進むことができますように。そう祈り願っています。

高井戸教会牧師　七條真明

日本基督教団 高井戸教会

☆10 月 16 日～11 月 13 日の主日礼拝、その他について（お読みください）

| 礼拝の予定 | 聖書・説教題 | 交読文 | 讃美歌 21 |
|---|---|---|---|
| 10 月 16 日（日） | コヘレトの言葉 4 章 9 節<br>コロサイの信徒への手紙 4 章 7～18 節<br>「神の国のために」 | 詩編 133 編 | 14, 55, 512, 28 |
| 10 月 23 日（日） | イザヤ書 55 章 6～7 節<br>ルカによる福音書 15 章 11～32 節<br>「あなたを待っている神」 | 詩編 103 編 | 493, 197, 451, 29 |
| 10 月 30 日（日）<br>教会全体修養会 | 聖書箇所：未定<br>「教会は教会らしく」<br>神代真砂実先生（東京神学大学教授） | 未定 | 未定 |
| 11 月 6 日（日）<br>献堂記念礼拝 | 詩編 127 編 1～5 節<br>エフェソの信徒への手紙 4 章 12～16 節<br>「神がお建てになる家」 | 詩編 84 編 | 390, 300, 81, 26 |
| 11 月 13 日（日） | エゼキエル書 34 章 11～16 節<br>ルカによる福音書 19 章 1～10 節<br>「失われた者を捜して救うために」 | 詩編 51 編 | 83, 120, 476, 27 |

10 月 16 日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況に大きな変化がある場合には、以下の記載とは変わってくる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、長らく 2 回に分けて行われてきましたが、10 月 2 日より 1 回の礼拝(午前 10 時 30 分開始)に戻りました。どうぞ開始時間等、お間違えのないようご出席ください。なお、手指の消毒、ディスタンスをとっての着席、マスクの着用等の感染対策は続けていきますが、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第 1 日曜日の礼拝においては、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日の礼拝の開始時間が、10 月 2 日より午前 9 時から、となりました。礼拝堂で礼拝を捧げ、9 時 20 分より分級を行います。幼小科の分級は礼拝後、1 階大集会室において、また同じ時間帯に父母分級が 1 階小会室において行われます。

中高科は、毎日曜日午前 9 時 30 分より、2 階会議室において行っています。

◎オンライン祈祷会について

Zoom というアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月 1 回（第 1 日曜日の午後 5 時より）行っています。

◎求道者会について

毎月第 4 日曜日の礼拝後、11 時 50 分～12 時 20 分（約 30 分間）、礼拝堂において行います。神代真砂実著『改めて学ぶ、教団信仰告白』（東神大パンフレット）をテキストに用いての学びです。どうぞどなたでもご出席ください。

◎その他（今後の予定）

10 月 30 日には教会全体修養会が行われます。また、11 月 6 日に献堂記念礼拝、11 月 20 日に召天者記念礼拝を捧げます。

日本基督教団 高井戸教会

9月の礼拝説教から（＊9月25日の礼拝説教の要約）

## 「キリストの言葉が豊かに宿るように」（コロサイの信徒への手紙3章12～17節）

**牧師 七條真明**

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい」。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから」。この手紙を書いた使徒パウロは、コロサイ教会の人々にそのように語りかけます。コロサイ教会は、使徒パウロの伝道によって生まれた教会ではなく、同労者エパフラスによって生まれた教会でした。また、少なくともこの手紙を書いている時点では、パウロはまだ明らかにコロサイ教会を訪ねたことはなかったのです。したがって、コロサイ教会の人たちのことを、パウロは具体的にはあまり知らなかったであろうと思います。しかし、パウロは、そのような中で、コロサイ教会の人たちについて知っていることをはっきりとこう言うのです。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されている」。

コロサイ教会の人たち、あなたがたはイエス・キリストを救い主として信じ、キリストの体である教会に生きる者とされた人たち。あなたがたがそのような者にされているということは、ただ自分の思いや判断や努力によってそうなっていることとは違う。それは、神の選びの中で起こっていること。神さまの選びの中で、あなたがたは聖なる者とされ、神に愛されている。神の愛の中に置かれている人たちだ、とパウロは語ります。

神の選びの中で、主イエス・キリストを信じる者とされ、教会に生きて、神さまのもの、神に愛されている者として生きている。生かされている。だからこそ、その神の愛と恵みにふさわしく生きることが命じられます。「憐みの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身につけなさい」。

コロサイの信徒への手紙第3章12節以下には、私たちがどのように生きるべきか、そのことを私たちに命じる言葉、勧めの言葉がいくつも出てきます。「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても赦し合いなさい」（13節）。「愛を身につけなさい」（14節）。「いつも感謝していなさい」（15節）。この箇所には、勧めの言葉、私たちに生きるべき道を指し示す言葉が、いくつも畳みかけるように、パウロによって語られているのを、私たちは見出します。

私たちは、ここに畳みかけるように記されて出て来る、私たちが生きるべきところを指し示し、私たちに具体的に命じる勧めの言葉の前に立つ時、私たちが抱く思いはどのような思いでしょうか。それは、しばしば、どんなにここで語られているところから遠いところに生きている自分であるかを思わざるを得ないということではないでしょうか。「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容」、「忍耐、赦し」、「愛」、「感謝」。自分の生きている現実の姿からどんどん遠ざかる。そのような思いが湧いてくるのです。

「赦し」ということ一つをとっても、そうでしょう。「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい」。そう命じられます。互いに忍び合い、赦すこと。責めるべきことがあっても、というのです。

私がキリスト教会の牧師として歩む中で、たくさんの方たちから、戸惑いの思いを抱くこととして度々質問を受けてきたことの一つは、主イエスが教えてくださった「主の祈り」における罪の赦しを求める祈りを巡ってです。主イエスは、「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と祈るように、とおっしゃった。神さまに向かって、「我らの罪を赦してください」という祈りに、「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく」という言葉がくっついている。自分には赦していない人がいる。赦せていない人がいる。この祈りのとおりではない。だから、戸惑いの思いを禁じ得ない。その思いが高じて、祈れないとの思いが湧いてきたりする。この祈りを巡る、そのような思いを多くの人から聞いてきたのです。

私たちの誰もが、その思いを理解するのではないでしょうか。さらに、聖書は、パウロの手紙を通して、「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい」と命じている。どうしたらよいのか。そう思うのです。

しかし、今日の箇所について、そう思う時に、見落としていけないことは、「赦し」に生きること、私たちが「責め合う」ことに生きるのではなく、「赦し合う」ことに生きるように命じる13節において、それに続く言葉として、パウロによってこう語られていることです。「主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい」。

私たちは、ただ赦せない、赦し合えないという状態のまま、神さまから放り出されているのではないのです。赦せない、赦し合えない、そういう私たちを主が赦しの中に置いていてくださる。赦せないと思う相手、赦そうと思っても赦せない自分、その双方を、神の赦しの中に置くために、既に主イエス・キリスト、救い主の十字架は立っているのだということです。

そのことは、「キリストの言葉」、聖書において私たちに語りかけられている生きた神さまの御言葉を聞くところにおいて、いつも見えてくることです。